慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | プルーストの小説におけるcomme, comme siの頻度と特色 |
| Sub Title | Comme, comme si dans les œuvres de Marcel Proust |
| Author | 森, 昌己(Mori, Masami) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1993 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.187(170)- 202(155) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 松原秀一教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0202 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# プルーストの小説における comme, comme si の頻度と特色

森　昌己

表1，表2，表3
まえがき
1．“les plaisirs et les jours” に於て
2．“Jean Santeuil” に於て
表4．“A la recherche du temps perdu” に於ける comme, comme si, que si（巻と章別）
まとめ
注　作品の題名は，2回目からは略記する。

表1　「楽しみと日々」

| | comme | comme si | 比較＋que si |
|---|---|---|---|
| 友人 W.ヒースに | 12 | 0 | 0 |
| B.シルヴァンドの死 | 30 | 3 | 0 |
| ヴィオラントまたは社交好き | 12 | 0 | 0 |
| イタリア喜劇断章 | 39 | 0 | 0 |
| ブーヴァルとペキュシェ… | 2 | 0 | 0 |
| ブレイヴ夫人の別荘暮し | 14 | 1 | 1 |
| 画家・音楽家の肖像 | 5 | 0 | 0 |
| 若い娘の告白 | 16 | 1 | 0 |
| 町での晩餐（さん） | 8 | 2 | 0 |
| 悔恨・夢想・時の色 | 108 | 5 | 1 |
| 嫉妬の終り | 29 | 5 | 0 |
| 計　161p. | 275 | (＋)17 | 2 |

1 p　1.71　292 1p　1.81

表2 「ジャン・サントゥイユ」

| | comme | comme si | 比較＋que si |
|---|---|---|---|
| 序文 19p. | 37 | 4 | 0 |
| 幼年期 75p. | 161 | 12 | 0 |
| イリエで 77p. | 243 | 12 | 0 |
| ベグ・メイユ 49p. | 113 | 17 | 2 |
| レヴェイヨン家 100p. | 308 | 24 | 1 |
| 駐屯の町 39p. | 74 | 8 | 0 |
| マリーの醜聞 40p. | 78 | 3 | 0 |
| 事件をめぐって 41p. | 81 | 10 | 1 |
| 社交ぐらし 48p. | 89 | 7 | 0 |
| 社交人 37p. | 70 | 3 | 0 |
| 恋愛論 109p. | 327 | 48 | 0 |
| 両親の老年期 26p. | 67 | 4 | 1 |
| 計 698p. | 1648 | (＋) 150 | 5 |
| | | 1798 | |
| | 1 p. 2.36 | 1p. 2.58 | |

表3 「失なわれた時を求めて」

| | comme | comme si | que si |
|---|---|---|---|
| 「スワン家の方」418p. | 717 | 105 | 9 |
| 「花咲く乙女達の蔭で」512p. | 865 | 85 | 21 |
| 「ゲルマント家の方」576p. | 747 | 121 | 15 |
| 「ソドムとゴモラ」513p. | 734 | 108 | 9 |
| 「囚われの女」397p. | 801 | 50 | 12 |
| 「消え去った アルベルチーヌ」270p. | 445 | 37 | 4 |
| 「見出された時」351p. | 734 | 50 | 9 |
| 計 3037p. | 5038 | (＋) 556 | 79 |
| | | 5594 | |
| | 1 p. 1.66 | 1.84 | |

表4　「失われた時」各巻に於て

| スワン | 1部 コンブレーI | II | 2部 スワンの恋 | 3部 土地の名・名前 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| comme | 61 | 263 | 277 | 116 | 717 |
| comme si | 9 | 29 | 53 | 14 | 105 |
| que si | 0 | 6 | 2 | 1 | 9 |

| 花咲く乙女 | 1部　スワン夫人をめぐって | 2部　土地の名・土地 | 計 |
|---|---|---|---|
| comme | 333 | 532 | 865 |
| comme si | 37 | 48 | 85 |
| que si | 9 | 12 | 21 |

| ゲルマント | 1部 | 2部1章 | 2部2章 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| comme | 415 | 46 | 286 | 747 |
| comme si | 72 | 9 | 40 | 121 |
| que si | 5 | 1 | 9 | 15 |

| ソドム | I | II　1章 | 2章 | 3章 | 4章 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| comme | 60 | 188 | 256 | 185 | 45 | 734 |
| comme si | 4 | 37 | 44 | 21 | 2 | 108 |
| que si | 1 | 2 | 3 | 2 | 1 | 9 |

| 囚われの女 p.519→ | p.589 | p693 | p.697 | p.830 | p.911 | p.915 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| comme | 117 | 296 | 4 | 244 | 129 | 11 | 801 |
| comme si | 8 | 14 | 0 | 14 | 14 | 0 | 50 |
| que si | 3 | 2 | 0 | 3 | 4 | 0 | 12 |

| 消え去ったA | 1章 | 2章 | 3章 | 4章 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| comme | 219 | 105 | 67 | 54 | 445 |
| comme si | 14 | 11 | 5 | 7 | 37 |
| que si | 3 | 0 | 0 | 1 | 4 |

| 見出された時 p.275→ | p.301 | p.433 | p.496 | p.625 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| comme | 44 | 254 | 120 | 316 | 734 |
| comme si | 3 | 20 | 8 | 19 | 50 |
| que si | 0 | 2 | 3 | 4 | 9 |

（注「囚われの女」と「見出された時」の区分は筆者による）

## まえがき

comme, comme si は，プルーストの読者には，おなじみの，そして気になる表現である。この表現が導くイメージについて，芸文研究19号の拙稿でも，諸例を挙げて考察した。また，十年以上前に，共同研究という形で，この表現のカード蒐集を試みた際に，筆者は「スワン家」ほぼ全部と「花咲く乙女」の，ごく一部について，例文を拾った。comme や comme si の使用例の，個々の意味づけが重要であるけれど，仲々難しい問題でもあるので，今回は，プルーストの主な作品，つまり，「失われた時」全巻，若い頃の「楽しみ」や「ジャン・S」における，この表現の頻度，使われ方，特色を考察したい。比較を示す aussi (plus) …que si や le même…que si の表現も，comme si の変形とみなした。「失われた時」のテキストは，新プレイアッド版 4 冊(1987～1989年)を，他の 2 作品も，プレイアッド版(1971年）を使用した。ここでいう comme は，「…のように」，comme si は「あたかも…のように」と訳す。Larousse の Lexis 辞典によれば，“comme si” は，“une comparaison avec un cas hypothétique”，「仮定の場合との比較」を示す。一方，“comme” は直説法または条件法の従属節を導きつつ，あるいは動詞抜きで“un rapport de comparaison, de conformité”，（「比較，合致の関係」をあらわす。同義語に ainsi que, de même que, tel que が記されている。常套句や具体例を示す場合や comme ça など「…よう

に」,「…ような」と訳せる場合は収集例に含めるが,「…として」の場合は省くべきだろう。また comme si について，つけ加えると，直説法の半過去や大過去を従えることが多いが，接続法を導くこともある点が，一般的には comme の場合と異なる点であろう。表の数字は，数え違いも起るので概数と考えて欲しい。最後に,「失なわれた時」の，ほぼ全語彙(い)を調べた E. BRUNET ; *Le vocabulaire de Proust*[1]に言及しない訳にはいかない。その第一巻を見ると comme は7622回，使われ，全単語の内，29位，si は6590回使われ，35位である。多く使われる巻のみを挙げれば，comme は,「ゲルマント」1388,「乙女」1288,「ソドム」1264,「スワン」1206。si は「ゲルマント」1127,「乙女」1075,「ソドム」1027,「囚われの女」980,「スワン」953となる。但し，ここでの "comme"は,「ので」「…とき」, "si" は,「もしも」,「非常に」のような，比較以外の意義も含めているし，comme si のような二語に関する調査は未だ，行なわれていない。Brunet の頻度数と，小生が行なった調査結果とを対照すれば，興味深いであろう。comme や comme si の諸例を，プルースト作品での文脈から切り離さぬよう努めつつ，まず「楽しみと日々」から検討してゆこう。

1　「楽しみと日々」に於て

表の総数をくらべれば分るように，comme, comme si の使用は 1 p. 当り1.7ぐらいであり,「失なわれた時」と，ほぼ同程度だが,「ジャン・S」2.3ほど多くはない。

「楽しみと日々」は，短い物語のいくつかや画家・音楽家を称(たた)えた詩，随想などの寄せ集めである。comme が頻出するのは「悔恨・夢想」であり,「イタリア喜劇」,「B・シルヴァンドの死」,「嫉妬の終り」と続く。1 p. 当りでは,「序文」が 3 箇で，一番多く，上の挙げた小品群がそれを追う。

comme の後に置かれる語や語句の内，同一のものを探そう。perle が代名詞 2 回を含め 4 回，fleur, papillon, autrefois, rêve が 3 回，poète, le soleil couchant, torture, eau, amie, femme, terre, mer, mouche, musique などが各 2 回である。この中で，perle と la mer は，別れてきた許りの女性の思い出や，愛の行為と結びつく。「あなたの身体の上で夜を過す真珠に

対するように」(p.132),「私の接吻は，砂の上に昇ってくる海のように，あなたの身体をおおい，叩く」(p.140)

女性の寝姿に結びついた，この海のイメージと真珠という語いは，やがて「囚われの女」の「眠れる彼女を眺める」のくだりで，海風，月光，植物，海鳥，船の語と共に再び登場する。

「胸の上に組んだ彼女の両手，彼女の真珠は，波の動きが揺らす，あの船，あの，もやい網のように，同じ動きにより，異なった風に移動し」,「私の自由になった片手は，アルベルチーヌの呼吸によって，また真珠のように持ち上げられるのだった。(共に，III，580)

恋人の手首のあの bracelets と，恋人達の優しさとを対比した文もあるが，次に多い yeux や papillon, eau，その他の例を眺めよう。

「ジュリアの髪は，香草のように良い匂いがし，その眼は，二本の花のように無邪気だ」(p.41)　眼＝花の例は，平凡であるが，やがて「スワン家」の中の「ゲルマント公爵夫人の眼は，…つるにちそうのように青みがかっていた」(I, p.175)の文の先触れと言ってよい。湖が花にたとえられる文例には蝶も現れる。「しおれる大きな花のように，その時，えもいえぬ様々な色合いの湖上で，ピンク色の小さな蝶達は，誘われたかのように，時々舞うのをやめながら」(p.135)。

ショパンの曲の気まぐれな軽快さが，花から花へ舞う蝶に，白い帆は，やはり蝶に，過去の思い出が，ピンでとめた蝶にたとえられる (p.82, 114, 144)。美の輝きへの精神の沈潜は，夕陽が海に沈む様に較べられる。部屋が夕日に照された様な情景は，月の光の仕業であり，この月光は，話者を夢の世界に誘なうと共に，悲しみを慰やす力を有する。その他の例を，大別すれば，聖性に関するもの，不吉もしくはサディスムに関するもの，思い出や過去の換起に関するもの，知覚や移動に関する事柄であろうか。聖性の諸例に,「崇高な朝」(p.119),「教会のマドンナへの宝物」(p.75),「聖遺物匣」(p.113),「二人の天使」(p.148),「シュロの枝のようにとても高く」(p.149)などがある。不吉あるいはサディスムに関する例には,「拷問」(p. 95,78),「牢獄」(p.44),「毒」(p.74),「船上での叫び声」(p.78)「悪夢から

のように目覚めた」(p.25) などが目立つ。

過去や追憶の例。「恋は，この夢のように，同じくらい不思議な変貌の力を伴って，私の上を通り過ぎた」「至る所で，つげの匂いが枝の主日のように，うっとりさせるのだった (p.106)。「私達の記憶のオランダ絵画，風俗画のような，いくつかの思い出を私達は持っている。」(共に p.130)，「昔のように」(p.20, 21, 151)「聖遺物匣」(p.113) など。

微風にそよぐ木の葉擦れ音を，夜の静けさの波の砕け散る音にたとえた文は美しい (p.117)。レオナールの聖ジャン・バチスト，ボードレールが言ったように，など芸術作品，芸術家の例も少しある。「かすかな日光の快活さを入れようとして，カーテンを持ち上げようとするかのように，かすかな微笑が，彼の口の先をわずかに，ゆったりと持ち上げていた。」(p.31) この文では，小さなものを，大きいものにたとえる，一種の拡大の手法が使われている。他に，comme の後ではなく，前にくる主語，主節の主語になる名詞その他は，当然多数あるが，印象的なものと頻度の高いものを挙げる。

太陽を，霊感を受け，多作な詩人にたとえた文(p.107)，うたた寝するブロンドの髪の青年にたとえた文 (p.104)，がある。また，「海は，世界の最初の日々のように，再び静かになった」，「こうして海は，音楽のように私達を魅惑する」(共に p.143)。太陽や海は，プルーストにとって特権的なイメージである。comme を一文で 3 個使用し，その頁だけで計 8 つも使う例が，チュイルリー公園に関する文 (p.104) に見られる。詩的効果の強調といえよう。家の陰気さを寺院のそれになぞらえたり (p.61)，家が「風のせいで船のようにきしる」(p.131)。後者は聴覚の面で興味深い。

comme si の例は，多少分りにくい。若い娘が母との神秘的な連帯感を感じる (p.93)，死期の近い病人が，神の十戒のように，恋人を諦める (p.159)，その病人と恋人が，それぞれの心の奥に神の存在を感じたかのように (p.162)，ろか装置(フィルター)によって，魂の中味が眼に移される (p.125) などの例の他は，社交人の観察 (p.97)，女性の視線と心理 (p.123)，自分の死後における恋人の気持やその姿や声への想像 (p.24) などがある。

以上のように，「楽しみと日々」における comme, comme si の例は，雑多であり，その幾つかは一緒に使用されている場合もあるが，修辞上の効果を狙っていることは確かである。「ジャン・サントゥイユ」では，どのように使用されているのだろうか？

2　“Jean Santeuil” に於て

章毎での comme の頻度は，表 2 の如く，「恋愛論」，「レヴェイヨン家」，「イリエで」，「幼年期」の順に多いが，ページ毎で見ると，「イリエで」3.15，「レヴェイヨン家」3.08，「恋愛論」3，「両親の老年期」2.58，「ベグメイユ」2.31，「幼年期」2.15の順になる。

comme si の方は，「恋愛論」，「レヴェイヨン家」，「ベグメイユ」の順に多い。comme と comme si の合計では，「恋愛論」が「レヴェイヨン家」より，わずかに多い。いずれにせよ，この 2 つの章が群を抜いて多い。まず，この 2 つの章を調べ，次に全体の章に亘って，頻度の高い語句や興味深い表現を検討しよう。

「レヴェイヨン家」をシンタックスの面から拾うと，comme の次に（前置詞），名詞または名詞句のくるもの150，comme＋名詞（または ce など）＋関係節59，comme＋（単なる）節53，comme＋その他（形容詞，代名詞，pour，現在分詞など）35，不明11となった。その他の中では，（過去分詞）形容詞が13例と多い。comme の次に名詞（句）や単文が来るのは普通のケースであり，二つ目の名詞（または代名詞）＋関係節の例がかなり多いのが，一つの特色ではないだろうか。関係代名詞の中では qui が33，que12，dont と où それぞれ 8，auquel 1 つである。具体例に移れば「…する一人の男のように」の例が多く，類似例を含めれば 5 つある（p.414, 422, 443, 508）。いずれも主人公ジャンの気分を描く直喩として使われている。最初の三例は，別の「疲れた男が…」（p.420）の例と共に，両親と口論をした直後の怒りの気持から，やや落ちつきを取戻す迄の，心の動きをあらわしている。「重病になった許りのときはまだ悪感しか感じず寝る時に自ら服を脱げるが，結局長い間，床につく男のように」。この一種のヒステリー状態のジャンを形容するのに，他にも「病んだ小羊の足のように」，「試験官から，自

分の進路にかかわる作文の題を口述された生徒のように」,「いら立った川の流れ」「傾斜した平原へすべての小川の流れが向い，合流するように」,「毒が全身にまわるように」などの表現が効果的に使われている。別の場面では,「財布を，誰にでも渡してしまう…人のように」と楽しい気分をあらわす例もある（p.443）　ここで気づくことは，作者は，強調したい挿話を語る際に，comme や comme si を乱用する傾向のあることだ。対象の描写に熱中するというか感情移入が始まると，途端に，おなじみの比較表現が目立つようになる。comme の例以外の表現で，この場面に於て「失われた時」で，今度は comme を伴って使われる文がある。「オーケストラの指揮者がタクトの一振りで，長調の朗らかなアンダンテの後に，短調の怒り狂ったアレグロを続けつつ」（p.414）。「ゲルマントの方」第一部の中間部，サン・ルーがジャーナリストの頬を叩く場面に，この表現が多少形を変えて使われる。（II, p.478）

さて，話を，先程の関係節に先行する名詞の例に戻そう。人では，女性達，娘達，各２例，芸術家，詩人，画家，偉大な女歌手，A･フランスの軽業師各１例，その他。物では太陽と水，各２例，その他である。太陽の一例は，クーロンブ嬢の顔が見えなくなり，又，現れる様と，冬の太陽が雲に左右される様とを較べている。

新聞を暖炉の火に投げこみ，それが燃える様を「捧げ物，犠牲者」,「蛇のように，一瞬のたうちまわり,「さなぎが蝶になったように」輝く炎の姿をして，飛び去った」（p.404）の文もある[(2)]。この例は，一種の置きかえや擬人化，形による連想，多少，子供っぽい自由な幻想といえるだろう。

レヴェイヨン家は，若い主人公ジャンの友人貴族アンリの恵まれた家庭であり，パリ郊外であるか地方にある，その別荘にジャンが招かれて，長期間滞在する。アンリの両親以外の，人物も数人出てくるが，その印象は希薄である。むしろ，晴天または，雨，嵐といった天候の描写，庭や公園の花々を眺めたり，森の中や農場の傍を散歩し，夢想にふけり，楽しい食卓を囲み，バルザックとその作品を偲び，芸術作品の素材，源泉となる自然描写，詩情・気分・思想・霊感・想像力などに思いをはせる。comme や

comme si は，この章の全体に亘って，平均的に多く，かつ集中的に使われている。comme si の場合も含めて，検討しよう。

Céphise Desroches という社交夫人の優雅さ，眼，神秘的な口，その言葉などについて (p.433)，紫色のジキタリスの花 (p.471)，レヴェイヨンの庭のゼラニウム，ナスタチウム，ばらの木，フクシアの花々の咲き乱れる様は，3つの comme si の文により，「中断されてない一連の絵」「過ぎ去った年月」のよみがえり，「蝶が舞うような，暑い時刻」の記憶がと描かれ，「スワン家」の「コンブレー」の章での花の描写以上に，過去の換起に力点が置かれている。その他に，陽の光について「隠れた神」，「水に映るガラス窓の反射」(p.475) 教会堂をおおうキヅタとあめりかづたの共存 (p.513)，冬，小川を渡るジャンの朗らかな気分 (p.529) が目立つ。

「レヴェイヨン家」と共に使用例の多い「恋愛論」の検討に移ろう。シンタックス別に分類すると comme＋（前置詞）名詞または名詞句（または節をなさぬもの）157，comme＋名詞（または ceux など）＋関係節64，comme＋節50，不明約50となり，「レヴェイヨン家」の場合とほぼ同じである，（不明の数の多さの解明によって多少変更はあるにせよ）。関係代名詞の中では qui が 42，que 17，dont 2，où 3，laquelle 1となり，qui と que が「レヴェイヨン家」より，いくらか多い。

この章に於て，comme をとる文の主語は，恋愛とそれにまつわる行為・心理，嫉妬，友情，女友達からのビー玉，まなざし（眼），あるいは太陽（光線），やその影，電灯の明り，書物などである。人物では，主人公ジャンや作中人物の気分・動作・態度・言葉である。恋愛は，「情熱」(p.746,747)，「病気」(p.747)，「主観的感覚」(p.748)，「人生」(p.824) に，プラトニック・ラブは「影」(p.830)，「彼らのキス」は「あのシードル酒」(p.847) にたとえられる。嫉妬は，「愛の裏側」，(p.752) あるいは「虐待された不健全な植物」(p.820) である。編者 P. クララックにより「小楽節」と題された 4 P.弱の挿話（スケッチ）を見よう (p.816)。ヴァントゥイユのソナタの挿話の原型となるものであり，恋人と聞いた曲を，数年後に再び聞き，失われた恋を懐（なつか）しむ話である。だが，この「小楽節」には，comme や comme si は，いた

って少ない。一方，スワンが夜会で聞くソナタの描写では，ヴァイオリンの音に続くピアノのメロディが月光に照らされる「波のピンク色のたゆたいのような」(Ⅰ, p.205)，「彼は，その小楽節に対して未知の恋らしきものを感じた」(Ⅰ, p.206)，「道で見かけて，ステキな女と思い，二度と会えないと絶望していた女性と友人のサロンで出会ったかのような」(Ⅰ, p.208) という具合に，音楽と，それから受ける感動を，例の表現の使用により巧みに描き切る。

さて「二つの小楽器が呼応するように，あるいは，「二本の離れた木からお喋りする二羽の小鳥のように」の表現は，日射しとその影の描写として，「恋愛論」「束の間の興奮」(p.774) の挿話(スケツチ)に見られる。ここでは，冬の晴れた午後の，ジャンの外出，祝日めいた町の様子，太陽の長い光線，セーヌ川河岸の雪景色，チュイルリー公園，噴水と大理石の神の像などが幸福な気分のもとに，比喩を多く使い記述される。わずか 4 p. に，comme は 34, comme si は 5 も出てくる。その多くは，ふりそそぐ日射しに関係する。日を浴びた正面の家は，祭りの準備ができているようであり，町の家々も金の甲冑(かつちゆう)に身を包んだ「様」子。ジャンは，光の通路を「乞食」か「野次馬」のように追い求め，後には，「ほろ酔いの男のような」気分になり，日射しも，主人の足を喜んでなめにくる「動物のように」，「神の音楽」の楽器のようと形容される。陽の光の雰囲気をあらわす la fête の語や, or, doré の語が数回使われ，主人公が昂揚感から「歌いながら」とか公園を「走り出す」場面は珍しく，後にシャン・ゼリゼのジルベルトの出現の情景を生(う)み，「打ち上げられた鯨(クジラ)のような」の表現が二作品に共通する (I, 390)。恋人の女性の部屋の灯を外から見て，「あの (金色の) 明かりは，彼女の存在の甘い保証であった。」(p.751) という文も，章の冒頭にあり，金色の光は海辺が憩いを与えるように，安心感を与えるようだ。

その他では，めのうのビー玉や，叔母にとっての主人公ジャンの存在，ダルプ公爵夫人の人物描写の際に comme, comme si が，いくらか多い。このビー玉は，幼な友達マリーからの贈物という点で記念すべき玩具であり，「生き生きとし，しかも超自然的な被造物」「奴隷あるいはペットの動

物」,「空の星のような予見と力(ちから)に満ちた静かな妖精」と形容される。マルメ夫人の夜会と洞察力のあるダルプ夫人のまなざしはアウステリッツの戦い(の結果)と神の意志に,較べられ,また,この公爵夫人のあいさつの際の,わざとらしい身ぶりや握手の仕方が,「施物(ほどこしもの)を与えるように」とか「火の中に勇敢に飛びこむかのように」と描写され,夫人は,他人のサロンの入口では「おびえた鳥のように」たたずむ(p.805)。これは,「失われた時」で必然的に多い社交界の人々の態度・話し方・心理の先駆けとなる例の一つである。

さて,「レヴェイヨン家」と「恋愛論」での comme, comme si の検討は,この位にしよう。他の章や,作品の全体に共通する特色は,あるのだろうか。comme 以下に来る同一名詞を拾ってみると「…する人(男)(だれか)」10回,「(…する)女」7回,「子供」7回,「神(々)」6回,「海」5回,「夢」5回,「反映」4回,「光,木々,疲労,夜,彫像,鏡,絵」各3回である。子供,神(々),夢,反映の語が多いのは,一つの特色ではないか?但し,comme の多い先程の2章を加えないと,正確な数字は分らない。決闘に関する挿話の際に使われる「処刑場」という語や,死刑執行人,看守,敵といった不吉語や,有名画家(レンブラント,ティシアン)とその作品,詩人(ホメロス,ユーゴー他),プロメテウス,ジュピターといったギリシャ神話の人物名も出てくる。「時間の外に」(p.401),「生が止まった瞬間に気を失い,幸福を感じていた」(p.300),「世界の外に」(p.307)の表現は,超時間性や「この世の外」への作者の関心を伺わせる。「レヴェイヨン家」と「恋愛論」の中で,comme に後置する名詞(句)に多い同一語を急いで調べた。「(…する)男」が6(レ)+3(恋),「…する誰か」「…する人達」,「人」が1+8,「女性」4+3,“vie” 4+2,“eau” 4+1,「子供(たち)」,0+4,「海(辺)」5+0,「太陽」3+0,「想い出」2+1,「昔」と「レヴェイヨンで」が各1+3,3+0,「神」1+1,「夢」0+2,「反映」0+1,「夜」1+2,「彫像」1+1である。全体では,男(だれか,人(達))23,女14,子供(たち)11,海(辺)10,神(々)8,夢7,太陽6,夜6,反映,木々,彫像,各5となる。主語と comme 以降の

語句とを較べると更に興味は増すだろう。以上の数字から「ジャン」での comme の，おおよその使用例が理解されるだろう。

comme si の例を少し検討して，「ジャン」については打ち切りたい。

集中して comme si が使われる例は，ベグメイユからの母への電話の際に，母の優しい声を聞く描写にみられる。「母の腕に抱かれたかのように」「彼女が始めて自分に話しかけたかのように」「死後天国で母と再会したかのように」(p.360) と comme si を 3 回続けて使用している。その直後も「死者の思い出のように」とか母の，ひびわれたような澄んだ声を「氷の小片」と今度は，comme が使用される。ついでにいえば，両親（とりわけ母親）に関して用いられる comme では，愛情や優しさ tendresse を示す例が目立つ。

comme si の諸例を散見しよう。一般論（作者の考え）を述べる，花や木の葉など自然の描写，登場人物の肖像・様子・心理，誇張（p.466），花と過去の残存 (p.473)，火→戦闘のイメージ，不仲 (p.578)，想像力もしくは一種の夢 (p.256)，幸福感 (p.297)，教会の入り口＝聖と俗の境界，といった所である。comme による比較は，形や線，色彩，時間，場所，大・小，天候，類似性などによる例が多く，分かり易い。comme si による文は，未だ検討が不充分なせいもあるが，「失われた時」の諸例に比して，分かりにくい面と，今一歩，描写が的確でない，迫力がないように感じられる。

最後に comme si の後に来る動詞時制の区別を記しておこう。

| | | |
|---|---|---|
| comme si ＋直説法半過去 | 87例 | |
| comme si ＋直説法大過去 | 31 | |
| comme si ＋接続法半過去 | 3 | |
| comme si ＋接続法大過去 | 15 | |
| comme si ＋条件法現在 | 1 | (p.372) |
| comme si ＋直説法単純過去 | 1 | (p.784) |
| | 計138（誤差12） | |

比較語＋que si は，直説法半過去 1 (p.633)，大過去 3 (p.359, 386, 790) 複合過去 1 (p.537)，接続法大過去 1 (p.872)，計 6 。

表4　「失われた時を求めて」に於けるcomme, comme si, que si（巻別，章別）

| 第1巻 | | 1部 コンブレーI | コンブレーII | 2部 スワンの恋 | 3部 土地の名・名 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| スワン家の方へ | comme | 61 | 263 | 277 | 116 | 717 |
| | comme si | 9 | 29 | 53 | 14 | 105 |
| | que si | 0 | 6 | 2 | 1 | 9 |

| 第2巻 | | 1部 | 2部 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 花咲く乙女たち | comme | 333 | 532 | 865 |
| | comme si | 36 | 48 | 84 |
| | que si | 9 | 12 | 21 |

| 第3巻 | | 1部 | 2部 I | 2部 II | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| ゲルマント家の方 | comme | 415 | 46 | 286 | 747 |
| | comme si | 72 | 9 | 40 | 121 |
| | que si | 5 | 1 | 9 | 15 |

| 第4巻 | | 1部 | 2部 I | 2部 II | 2部 III | 2部 IV | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ソドムとゴモラ | comme | 60 | 188 | 256 | 185 | 45 | 734 |
| | comme si | 4 | 37 | 44 | 21 | 2 | 108 |
| | que si | 1 | 2 | 3 | 2 | 1 | 9 |

| 第5巻 | | p.519→ | p.589 | p.693 | p.697 | p.830 | p.911 | p.915 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 囚われの女 | comme | | 117 | 296 | 4 | 244 | 129 | 11 | 801 |
| | comme si | | 8 | 14 | 0 | 14 | 14 | 0 | 50 |
| | que si | | 3 | 2 | 0 | 3 | 4 | 0 | 12 |

| 第6巻 | | I | II | III | IV | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 消え去ったアルベルチーヌ | comme | 219 | 105 | 67 | 54 | 445 |
| | comme si | 14 | 11 | 5 | 7 | 37 |
| | que si | 2 | 0 | 0 | 1 | 3 |

| 第7巻 | | p.275→ | p.301 | p.433 | p.496 | p.625 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 見出された時 | comme | | 44 | 254 | 120 | 316 | 734 |
| | comme si | | 3 | 26 | 5 | 19 | 53 |
| | que si | | 0 | 2 | 3 | 4 | 9 |

## 結びにかえて

「失われた時」についての，この表を簡単に解説しよう。comme に関しては，“considérer…comme…”のタイプを，「失われた時」の1巻から6巻迄は，表の数字に入れたが，7巻目と，「楽しみと日々」「ジャン・サントゥイユ」では入れなかった。意味合いが微妙なのである。さて，表で分るように comme, comme si は，共に最初の4巻で多いが，comme の場合は，「囚われの女」も多い。比較を示す comme の総数では，「花咲く乙女」，「囚われの女」，「ゲルマント家」，「ソドム」，「スワン家」の順になり，comme si は，「ゲルマント家」，「ソドム」「スワン家」，「花咲く乙女」，「見出され

た時」の順になる。頁数の多い巻に，これらの表現が多くなるのは当然なので，1ページ当りで調べよう。comme は，「ゲルマント家」2,155,「ソドム」2.10,「見出された時」2.09,「囚われの女」2.02,「スワン家」1.71の順である。comme si の方は，ページ当りでは，「スワン家」,「ソドム」,「ゲルマント家」,「乙女」,「消え去った A」,「見出された時」,「囚われの女」の順である。

comme si は，どの章で多く使われているか。1.「ゲルマント家」2部1章，2.「スワン家」2部,「スワンの恋」，3.「ソドム」2部1章，4.「ゲルマント家」1部，5.「ソドム」2部2章，6.「スワン家」1部2章，コンブレーII，7.「花咲く乙女」1部，8.「囚われの女」(p.830以降) 9.「ゲルマント家」2部2章，10.「ソドム」2部3章，11.「花咲く乙女」2部の順序であるようだ。comme や comme si の具体例の検討をここで行う余裕はない。ただ，有名なレミニサンスの諸例の内，マルタンヴィルの鐘塔やバルベックの三本の木の描写などでは，主に comme による比喩が多く使われ，バルベックの二度目の滞在で，亡くなった祖母を思い出すくだりでは，comme si が集中して使われていて，詩情や過去の換起力，主人公の真情が感じられ，美しい文章である。

（了）　　(1992年11月)

**注**

(1)　I，II，III，SLATKINE-CHAMPION, GENÈVE-PARIS, 1983

(2)　cf. G. フローベル「ボヴァリー夫人」第一部末尾。暖炉で燃やした厚紙のカスが「黒い蝶のように……ヒラヒラしつつ飛び去った」